

# 角田 健 論文内容の要旨

主 論 文

Prevalence of depressive symptoms and related risk factors in Japanese patients with pulmonary nontuberculous mycobacteriosis

日本の肺非結核性抗酸菌症患者における抑うつ症状の有病率と要因

角田 健、髻谷 満、山根 主信、高尾 聡、黒山 祐貴、  
森 広輔、川原 一馬、大野 一樹、大松 峻也、千住 秀明

Psychology Health & Medicine, 1-8, 2020 Sep 23  
(DOI: 10.1080/13548506.2020.1808235)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻  
主任指導教員：千住 秀明 教授

## 緒 言

近年、世界的に肺非結核性抗酸菌症（以下、肺 NTM 症）による感染症が増加し、日本の肺 NTM 症の罹患率は、世界的にも高い。肺 NTM 症は、長期間の治療を必要とする慢性疾患であり、患者は長期の治療期間中にネガティブな感情を経験するとされる。患者に生じる不安や抑うつ症状などのメンタルヘルスの問題は、服薬コンプライアンスを低下させることが多く、治療アドヒアランスに関する懸念を生じさせる。これらの理由から、抑うつ症状の評価や症状軽減に関する研究は、今後の肺 NTM 症の優先される研究分野の一つと考えられている。

COPD や肺結核患者と同様に、肺 NTM 症患者においても抑うつ症状を経験することや、抑うつ症状の検査に用いるスクリーニングツールにより有病率が異なる可能性がある。しかし、これまで肺 NTM 症患者を対象とした研究報告は少ない。今後、肺 NTM 症患者の服薬コンプライアンスや生活の質を良好に保つために、抑うつ症状のスクリーニング検査や対策が必要となる可能性がある。

本研究は肺 NTM 症患者に対して、抑うつ症状のスクリーニング検査を行い、抑うつ症状の有病率を明らかにすることと、抑うつ症状のスクリーニングに用いられる代表的な CES-D と HADS の 2 つのスクリーニングツールにより有病率が異なるのか否かを明らかにすること、および抑うつ症状の判定に影響を与える要因について明らかにすることとした。

## 対象と方法

対象者は、2016年12月から2019年8月までの間に、複十字病院で肺NTM症と診断された95名とした。本研究では、抑うつ症状のスクリーニングツールであるCES-DとHADS日本語版を使用した。

抑うつ症状の独立因子を評価するために、年齢、体格指数、肺機能、呼吸困難、咳症状、運動能力に関するデータを得た。有病率に各尺度で有意差があるかMcNemar検定を用いて判定した。各尺度の特徴を明らかにするためMann-Whitney U検定を用いて、抑うつ症状の有無でグループ分けした患者間を比較した。CES-DおよびHADS-Dにより抑うつ症状と判定される要因の解析にはロジスティック回帰分析を行い解析した。

## 結 果

抑うつ症状の有病率はCES-Dでは37.9%、HADS-Dでは26.3%であった。McNemar検定により、CES-DとHADS-Dの有病率には有意な差があった。ロジスティック回帰分析により、CES-DとHADS-Dのどちらも咳症状が抑うつ症状の判定に影響を与える要因であった。

## 考 察

本研究における肺NTM症患者の抑うつ症状の有病率はCES-Dで37.9%、HADS-Dで26.3%であり、COPDや結核患者と同様に一般集団よりも高かった。肺NTM症患者の健康を維持し、治療成績を向上させるためには、抑うつ症状のスクリーニング検査と抑うつ症状の治療が必要である。しかし、検査に用いるツールにより、抑うつ症状の有病率は異なる可能性がある。

本研究では、年齢、BMI、呼吸困難、運動能力は関与せず、咳症状が抑うつ症状に影響を与えていた。肺NTM症患者に対する咳症状の治療や、心理士の専門家によるケアや介入は肺NTM症患者へ有用となる可能性がある。

これまで、肺NTM症患者の抑うつ症状の研究は数が少ない。本研究は、日本の肺NTM症患者の抑うつ症状の有病率を明らかにした数少ない疫学研究としても意義のある研究である。